

行為の理解を可能にする共在経験の長期的相互行為分析

齋藤 巴菜(公立はこだて未来大学大学院生) 坂井田 瑠衣(公立はこだて未来大学)

1. はじめに

本研究の目的は、コミュニティ固有の話題を立ち上げる相互行為を分析することで、累積された共在経験(shared experience of co-presence)をもとに、相互行為の参与者たちが互いの行為を理解し合うことが可能になっていることを明らかにすることである。

Deppermann (2018) は、自動車学校での教官と生徒の発話が、時間の経過によってどのように変化するかを分析した。その結果、教官は、生徒への指示の行為構成を、文法的にも、情報内容に関しても、徐々に簡素化していくことを明らかにした。このことから、発話の理解可能性は、参加者の間ですでに共有された会話が前提となっていることが明らかになった。このように相互行為分析を用いて、人びとの行為やその意味が、時間の経過とともに繰り返される相互行為を通じてどのように変化するかを明らかにする方法を、長期的相互行為分析(longitudinal interaction analysis)という(Deppermann & Pekarek Doehler, 2021 など)。本研究では、長期的相互行為分析を用いて、コミュニティ固有の話題を立ち上げるという現象が生じた複数の相互行為を分析することで、縦断的にこの現象を分析することを目指す。このとき、今ここで産出される発話や身体動作が、コミュニティ固有の話題に関連するものとして理解可能にされている方法を明らかにするためには、相互行為のプロセスを協働的行為(co-operative action)としてみる必要があると考えた。

グッドウィン(2017)は協働的行為という概念によって、相互行為のプロセスとは先行する行為や意味構造に変容操作が加えられ、またそれらが累積されるものであることを明らかにした。相互行為の参与者たちは、共に利用可能な素材としての先行行為である基質に対して、再利用や分解、変形などの何らかの操作を施していくことで新たな行為を生み出すことが可能になる。先行行為者の行為の構造を保持しつつ、その構造を系統的に変容させることで何らかの新たなものをつくり出すという点において、この過程は累積的なものであると捉えることができる。またグッドウィン(2017)は、この協働的行為によって、人間の文化や知識が系統だったやり方で累積していくことを可能にするということについて明らかにしている。こうした文化や知識の累積は、さまざまなコミュニティで実践されていると考えられ、その文化や知識のあり方は多種多様に存在していると考えられる。このように協働的行為として相互行為をみることで、経験が累積される過程と、累積された経験をもとに、どのように今の相互行為が作り上げられているのかを明らかにできるのではないかと考えた。

しかし長期的相互行為分析には、変化に対する当事者の視点をどのように維持するのかという方法論的課題がある(Deppermann & Pekarek Doehler, 2021)。Deppermann らは、最初から最後まで観察でき、変化を余すことなく捉えられる観察対象を選ぶことによってこの課題を解決できるとしている。本研究ではこの課題の解決策として、参与観察(藤田・北村, 2013)を行なう。参与観察とは、ある特定の集団の中に入り、自然に行なっている会話ややりとりを内側から観察・記述する調査方法のことである。これにより、時間の経過と共に繰り返される相互作用を通じて生じる変化に対して、観察対象である相互行為の参与者たちの視点に立った分析が可能になると考えた。そこで本研究の長期的相互行為分析においては、参与観察をした上で相互行為分析を行なう。本研究では同期大学院生の浪尾(第一著者)・白石・長内(いずれも仮名)が共在するときに、長内の食事の仕方という固有の話題を立ち上げる相互行為場面を分析する。

2. 研究方法

研究対象は、同期大学院生である浪尾・白石・長内の相互行為である。本研究では、同期大学院生らの相互行為データを収集するため、参与観察とビデオ収録を行う。参与観察期間は、2022年4月から2024年12月現在に至るまでの約2年半である。ビデオデータの収録期間は、2023年4月19日から2024年10月29日までであり、総収録時間は約90時間である。本研究ではこの中から、長内の食事や食事内容といった食に関する習性に対する会話が行なわれていた、2023年5月9日と同年6月27日のビデオデータを分析対象とする。

5月9日のデータは、(1)白石と長内の相互行為開始場面、(2)白石と浪尾の相互行為場面、(3)長内が白石と浪尾のいるテーブルに合流した後の相互行為場面に区切って分析する。6月27日のデータは、3人が同じテーブルを囲みながら、各々研究活動や食事をしている場面である。それまでの参与観察から、5月9日の時点で、長内の食事の仕方は固有の話題となっていたことはわかっていた。

それぞれの事例の相互行為を、ELANを用いて発話や身体動作に注釈を付けて書き起こし、トランスクリプトを作成する。本研究では、西阪(2008)とMondada(2018)の記法に従って発話や身体動作を書き起こす。

参与観察によって得られたエスノグラフィックな知識と、ビデオ収録によって得られたデータをもとに、相互行為

を協働的行為としてみることによって、参与者らが、今ここでの相互行為上関連性のあるものとして、累積されてきた知識や経験を他者の行為を理解するための資源として扱い、またそのような理解をしていることが他の参与者らに理解可能になるように相互行為の中で組織している方法を明らかにする。

3. 事例分析

3.1 事例(1)長内の食べかけのおにぎりが2つある

2023年5月9日に収録されたデータである。この事例では、長内が午前中に開けたおにぎり(AM おにぎり)が食べかけであることを忘れて、新しいおにぎり(PM おにぎり)を食べ始めていたという出来事が発生する。

3.1.1 場面1：長内と白石の相互行為

長内と白石が共在するときに、長内が出来事に気づく場面である。このとき浪尾は席を立っていた。

長内は椅子から立ち上がり、後ろにある自身の机のほうを向き(1行目)、椅子をしまう(2行目)。白石は、長内が立ち上がる時には長内を見ているが、椅子をしまうときには、向かって左側のテーブルに視線を向ける。長内は2行目で自身の机に視線を向けたことで、昼食としていま食べているおにぎりとは別に、封の開いた同じ味のおにぎりが机の上にあることを発見し、素早くテーブルのほうを振り向く。そして長内は3行目で、PM おにぎりに視線を向けながら、「えっ」と驚きの反応を産出する。

この発話を聞いた白石は4行目で、長内の視線をたどり長内の驚きの反応となった対象を探したのち、5行目で「え」という3行目の長内と同じ形式を用いた発話と表情の変化によって驚きの反応を産出する。驚きの対象となった出来事に気づいたことを知らせ、また音調を上げることで驚きを強調しながら出来事への理解を示す。また白石は、笑いを産出することで、長内が発生させたその出来事が、笑いうる出来事として理解できるものであることを示す。この白石の反応に対して長内は、笑顔になることで、白石の理解に同調的な態度を示す。

白石は続けて6, 8行目で笑いを産出し、9行目で長内に専門性がある人としての架空の役割(「先生」)を付与させ、遊びの枠組み(Bateson, 2023)を立ち上げる。長内は10行目で笑いを産出し、続けて白石も同じ様に笑いを産出する(11行目)。白石は12行目で、2個のおにぎりが同時に食べられているという出来事に対する自身の理解を身振りで示しながら、13行目で長内の食べ方に対して評価的に発話し、出来事に対する深い理解を立証する(Sacks, 1992)。このとき、13行目の「ますね」という敬体は、9行目で長内に付与した役割と一貫していることから、この発話は9行目から続くものとして理解可能である。13行目に重なる形で、長内は強く笑いを産出し(14行目)、白石の理解に同調する。

その後、0.37秒の沈黙が発生した後、長内は16行目で出来事を評価する。この発話に白石は17行目で笑いを産出し、長内の評価に対して同調的な態度を示す。その後、0.36秒の沈黙が発生した後、再び笑いを産出する(19行目)。20, 23行目で、原因がわからないことを主張し、自己を卑下するように出来事を評価する。これらの長内の発話から、出来事は長内の不注意によって引き起こされたものであるとわかる。このとき長内は、出来事に対する評価への同意の求めを白石に宛てることで、出来事に対する長内の理解を共有する。白石は21, 24行目で、長内の発話を引用しながら笑いを交えて同意を示す。

場面1では、9, 13行目の発話から、白石が出来事を理解する際に、固有の話題である長内の食べ方に関連させていることがわかる。白石の発話は、長内を何らかの専門性に長けた人として位置づけている一方で、具体的にどのような専門性なのかは公然化されていない。しかし、長内はこのような白石の理解に同調する。この反応から、ふたりの間ではその専門性が過去の共在経験をとおしてすでに共有されており、その共在経験を基盤に互いの行為を理解していることがわかる。また、この出来事は長内の食事の仕方として理解可能であるものの、実際は長内が意図した食事の仕方ではなく、不注意によって発生した失態として扱われる出来事であることが、白石にも共有されている。

場面1では、9, 13行目の発話から、白石が出来事を理解する際に、固有の話題である長内の食べ方に関連させていることがわかる。白石の発話は、長内を何らかの専門性に長けた人として位置づけている一方で、具体的にどのような専門性なのかは公然化されていない。しかし、長内はこのような白石の理解に同調する。この反応から、ふたりの間ではその専門性が過去の共在経験をとおしてすでに共有されており、その共在経験を基盤に互いの行為を理解していることがわかる。また、この出来事は長内の食事の仕方として理解可能であるものの、実際は長内が意図した食事の仕方ではなく、不注意によって発生した失態として扱われる出来事であることが、白石にも共有されている。

3.1.2 場面2：白石と浪尾の相互行為

浪尾が机の上に長内の食べかけのおにぎりがあることを発見し、それを白石に報告し、そしてその報告を受けた白石が、場面1での出来事を浪尾に知らせた後の場面である。このとき長内は席を立っていた。場面1の後、長内はPM おにぎり と AM おにぎりを移動させたため、場面2では、PM おにぎりが長内の机の上に置いてあるという状況である。

事例(1) - 場面1	
1	長内 @ (0.34) * (0.95) * (0.11) @ (0.99) @ (立ち上がるため) 前傾姿勢になる @ 振り返りながら立つ
白石	>> モニター * 長内 * 長内 (先ほどより視線下がる)
2	長内 @ (0.25) * (0.75) * (0.19) @ (0.18) @ 椅子を自分の机にしまう % AM おにぎり? @ 素早くテーブルをみる
白石	* 奥のテーブル
3	長内 % えっ % PM おにぎり (0.19) * (0.09) * (0.30) * (0.51) * (0.24) * (0.07)
4	長内 % AM おにぎり 白石 * 長内 * 長内の机 (AM おにぎり) * PM おにぎり
5	白石 ↑ え \$ () a @ . h h h h \$ 眉を上げる 長内 @ 笑顔になる % AM おにぎり
6	白石 . h (0.11)
7	白石 h h h . h
8	長内 % PM おにぎり
9	白石 ¥ あれ? ¥ @ 長内先生 長内 @ PM おにぎりを自分の机に置く
10	長内 ¥ h u h u ¥
11	白石 ¥ h u h u ¥
12	白石 (0.29) \$ (0.25) \$ 右左手を順に口元に近づけて おにぎりを食べる身振りを2度繰り返す-->
13	白石 ¥ 頻(張って)ますね ¥ え (h) h h (h h)
14	長内 [. h h . h h H H H . h h h
15	(0.37)
16	長内 ちょっとびっくりだなあ
17	白石 a h h h h h
18	(0.36)
19	白石 . h
20	長内 どうしちゃったんだろ [ね
21	白石 [どお (h) し (h)
22	(0.13) \$ (0.02) \$ PM おにぎりを覗き込むようにして2回確認する-->
23	白石 これはちょっとね、おかしいね 長内 @ AM おにぎりを机に置く
24	白石 . h お (h) h o ¥ かしいね ¥

浪尾は1行目で、情報の追加を予示する発話を産出する。この発話に重なって白石は2行目で、出来事の原因が長内の不注意であることを浪尾に報告する。このとき白石と浪尾は、ともにPMおにぎりに視線を向けており、白石は発話の終わりで浪尾に視線を移す。その後、0.57秒の沈黙が起きている。この沈黙ののち浪尾は4行目で、1行目に続くように、2つのおにぎりが同じ味であることを白石に視線を向けながら報告する。白石は、これに対して5行目で笑いを産出する。

浪尾は6, 8行目で、4行目で報告した状況と対比するように、2つのおにぎりの味が異なる場合には、出来事の合理性を理解できることを示すことで、味が同じこの状況では合理性が理解できないことを示す。白石の9行目の発話から、白石は6行目の発話ですでに浪尾の意味するところを理解したことを示している。その後10行目で0.41秒の沈黙が生じたのち、11行目で白石が笑いを産出する。浪尾は13行目で、再びこの出来事が合理性のないものであるという理解に対する同意を白石に求める。14行目で1.03秒の沈黙が生じ、白石は15行目で出来事に対する評価(「や:ばいな(::)」)を与えることで、浪尾の理解に対する同意を示す。

続けて白石は15, 16行目で、自身が浪尾の発話に重なって産出していた2行目の発話に、「開けて」を挿入した発話を産出する。白石はここで、出来事を通して得た長内に対する理解のかたちを定式化している。2行目では、この出来事がなぜ起きたのかに対する白石の理解を示し、15行目では、「開けて」を挿入することにより、2行目の説明をより詳しいものへと変容させることで、その不注意の深刻度を上げている。17行目で浪尾は、この15, 16行目の冗談のような内容の発話に対してすぐに笑いを産出することで、この出来事を引き起こした長内への理解を表示する。さらに白石は18行目で、出来事の冗談性を助長させる一方で、笑いを産出することで出来事の深刻度は下げている。19行目で浪尾も、白石と同じタイミングで、互いに視線を合わせながら笑いを産出する。

場面2では、出来事を通して、白石と浪尾の間で、長内の習性についての新しい知識の共有や互いの理解の確かめ合いが行なわれつつ、長内に対するふたりの理解の確かめ合いも行なわれていることがわかる。さらに白石は、出来事を通して得た長内に対する理解のかたちを定式化しており、相互行為を通して浪尾にもその理解を共有している。

3.1.3 場面3：長内と白石と浪尾の相互行為

長内が白石と浪尾のいるところに合流したあと、浪尾は出来事に気づいていることを長内に知らせる。その後、浪尾と白石が、出来事が起きた原因を推測し、長内の習性に対する理解を示す場面である。

1行目で浪尾は、予期しない事態が起きている可能性を示唆する発話を、白石に顔を向けながら産出する。2行目で0.23秒の沈黙が生じたのち、3, 4行目で長内と白石が笑いを産出する。再び5行目で0.26秒の沈黙が生じ、その後浪尾が笑いを産出する。7, 9行目の白石の発話は、笑い声でなされており、反語のような形式を用いている。この形式から、場面2の浪尾との相互行為の中で定式化した発話を基質として、1行目の浪尾の発話「まさかね」に合わせ、「なんてね」が挿入された発話であるといえる。この協働的行為によって、出来事を通して得た長内に対する理解という意味は保持しつつ、新たに出来事への冗談性を見出している。このとき、長内は笑いを産出する(6行目)。

10行目で浪尾は、白石の発話に重なって笑いを産出し、再び、そんなことがまさかあるはずないと、笑いを交えながら発話を産出する。このとき、浪尾は白石の手元のPCのあたりに、白石は浪尾に視線を向けている。このように浪尾と白石は、協働的に発話を組み立て、出来事に対する互いの共通理解を共有していると考えられる。

11行目の0.19秒の沈黙ののち、12行目で長内が聞き返す発話を産出している。この発話は、冗談性を含む発話に対する反応であることや、公然的にピッチが上昇していることから、遊びのような側面があると考えられる。

13, 15行目で浪尾は、再度「なんて」を付けた発話を組み立て、引き続き長内の行為に冗談性を見出し、視線も長内に向けることでこの発話を強く長内に宛てる。14行目で白石は、笑いを産出し、冗談に対する理解を示す。16行目で長内は、12行目で産出した自身の発話を引用するように発話を産出する。

場面3では、出来事が笑いうるものとして理解可能であることや、長内の不注意によって引き起こされたものであることを互いに確かめ合っていることがわかった。白石は、やりとりに合わせて自身で定式化した発話に操作を加えることで、冗談性などの意味を新たに付与させながら、長内に対する理解を表示していた。

3.2 事例(2)長内がキンパを食べていないように見えた白石

事例(1) - 場面2	
1	浪尾 * >しか[もく]
2	白石 [た*べてる+ことを忘れるんだよ* 白石 *PMおにぎり *浪尾 浪尾 +PMおにぎり
3	(0.57)
4	浪尾 どちらも塩サ+バだからね +白石
5	白石 .h:h h h
6	浪尾 >なんかくどっか-味変したくてとか[だったら 白石 [.h
7	浪尾 ま[あまあ百歩譲ってってなるけどさ 白石 [たしかに
8	(0.41)
9	白石 .h
10	(.) ((0.11))
11	浪尾 どちらも鯖なんだよ
12	(1.03)
13	白石 や:ばいな(::) (.) 開けて食べてることを忘れる
14	白石 から[(な)
15	浪尾 [h h h h [h h . h
16	白石 [そんなことある+:? * [a h h
17	浪尾 [a h h h
18	白石 +白石
19	浪尾 *浪尾

事例(1) - 場面3	
1	浪尾 #° まさ+か(h)*ね° #顔を白石の方に向ける +白石
2	白石 *浪尾
3	長内 >>長内のPC画面-->>
4	(0.23)
5	長内 .h h
6	白石 () ((笑い))
7	(0.26)
8	浪尾 .h
9	白石 ¥食べ[てることを]
10	長内 [. h h a h a
11	白石 忘れる[なんてね¥
12	浪尾 [° h h h ° < ま(h)-まさか+ない*よ° ね° +白石のPCあたり
13	浪尾 *浪尾
14	白石 (0.19)
15	長内 >なんです[↑ か<
16	浪尾 [一口-食[べてから::
17	白石 [. h ° a : h h h
18	浪尾 (.) [思い+出すなんて
19	長内 [なんです↑か
20	浪尾 +長内

事例(1)から約1ヶ月半後の6月27日に得られたデータである。このとき齋藤は研究活動をしており、白石と長内は昼食をとっていた。

白石は1行目で、長内の昼食であるキンパを見て、長内を確認し、再びキンパに視線を移す。続けて白石は2行目で笑いを産出し、笑いうる出来事が発生していることを共有する長内と浪尾に知らせる。白石の笑いに気づいた長内は白石を見る。浪尾も3行目で、白石の笑いに反応し顔をあげる。長内と浪尾は、白石が見ているテーブルの上に視線を向け、白石の笑いの対象を探しているようである。

白石は4, 5行目で、「あけただけなんですか今回は」と言いながら、キンパを指差す。これは、長内がキンパの蓋を開けただけで食べていないことに笑ったという、自身の笑いを長内と浪尾に理解可能なものにする発話である。この発話に重ねて長内は6行目で、食べかけのキンパを指差しながら、白石の理解をいったんは否定するものの、7行目で向かいに座っている白石からは食べているのが見えなかった可能性に言及し、4, 5行目の白石の発言に同調する。このとき、長内はトレーを回して白石に食べかけのキンパを見せる。

8行目で白石は、食べかけのキンパを確認し、7行目で長内が推測したとおり認識のずれがあったことを認める。9行目と10行目で長内と浪尾の笑いが同時に産出され、白石が笑った出来事への理解を表示する。

事例(2)では、白石が「開けて食べてることを忘れる」という事例(1)で定式化された発話を基質とし、「開けただけなんですか」と食事の進捗の度合いに対する認識の確認要求をすることで、自身の発話を長内の食事の仕方という話題に関連のある協働的行為として理解可能にしていることがわかる。また白石は、相対的表現である「今回」に、対比の助詞「は」を用いることで、指示対象がすでに互いの間で知識として共有されていることを示している。このことから白石は、長内との過去の共有経験から、いまなされている長内の行為を理解して笑っていることが示されている。この発話に重なって、長内は6行目で否定的応答として「食べている」という趣旨の発話を産出する。この応答から、長内は白石の確認要求が単に開けただけであるかどうかの確認ではなく、自身の習性に基づく行為に対する指摘として食べているかが問われていると理解していることがわかる。

4. まとめ

本研究では、長期的相互行為分析を用いて、コミュニティ固有の話題を立ち上げる相互行為の分析を行なった。今回の分析では、主に白石が長内の行為を理解する際に、共有経験を参照していること、またそのことを相互行為の参与者である長内と浪尾に理解可能にするために用いている方法が明らかになった。

5月9日の分析から、白石は出来事に対する理解を示すときに、遊びの中で専門性をもつ者として役割を与えることによって、共有経験を基盤として出来事を理解し、固有の話題と関連がある出来事として扱っていることを長内に理解可能にしていることがわかった。また白石は場面1から3にかけて、自身がいったん定式化した発話に対し、やりとりに合わせて操作を加えながら、長内に対する理解を表示していた。

6月27日に白石は、その定式化された発話に、変容操作を加えることで、共有経験をもとに発話を産出しているということを、他者に理解可能な方法で示していることがわかった。さらに質問を組み立てる際に「今回は」を用いることで、指示対象がすでに互いの間で知識として共有されていることを表示していることがわかった。

参考文献

- グレゴリー・ベイトソン, 佐藤良明(訳) (2023). 精神の生態学へ【上】岩波書店
- Deppermann, A. (2018). Changes in turn-design over interactional histories: The case of instructions in driving school lessons. In A. Deppermann & J. Streeck (Eds.), *Time in embodied interaction: Synchronicity and sequentiality of multimodal resources* (pp. 293-324). John Benjamins.
- Deppermann, A., & Simona, P. D. (2021). Longitudinal conversation analysis: Introduction to the special issue, *Research on Language and Social Interaction*, 54(2), 127-141.
- 藤田結子・北村文 (2013). 現代エスノグラフィー—新しいフィールドワークの理論と実践—新曜社
- チャールズ・グッドウィン, 北村隆憲(監訳), 須永将史・城綾実・牧野遼作(訳) (2017). 人間の知と行為の根本秩序—その協働的・変容的特性—人文学報, 513-1, 35-86.
- Mondada, L. (2018). Multiple temporalities of language and body in interaction: Challenges for transcribing multimodality, *Research on Language and Social Interaction*, 51(1), 85-106.
- 西阪仰 (2008). トランスクリプションのための記号 [v. 1.2 2008年1月]. <https://www.augnishizaka.com/transsym.htm> (参照 2024-12-12)
- Sacks, H. (1992). *Lectures on conversation*, Vol. 2, Blackwell.

事例 (2)		
1	白石	* (0.29) * (0.21) * (0.62) *キンパ見る *長内見る *キンパ見る-->
2	白石 長内	hh% ((鼻で笑いを産出する)) %横目で白石見る
3	浪尾 長内 白石	+ (0.22) % (0.15) + (0.31) +顔あげる +テーブル見る %テーブル見る
4	白石 長内 白石 浪尾	%あけ\$+ただけなんです\$こ(h)+ %白石の手 \$右手キンパ指差す \$引いた右手口元へ +白石の手 +キンパ
5	白石	[んかい(h)h↑え(h)
6	長内 長内	[>いや@食べた食べ@た)< @両手キンパ指差す
7	長内	@キンパのトレー掴む @見え%て@ない%か%もし@れない
8	白石 長内	[見えてな*(い)(h) @左手トレー回して白石にキンパ見せる @右手キンパ指差す @トレー戻す %白石 %キンパ %白石 %白石 -->*
9	白石	[(h)hhl, hL, hL, hhl, h, h, hhl, h
10	浪尾	[(う)hahaha(ほんつお)